説教要旨『行くために、戻る』

ルカによる福音書 17 章 11～19 節

毎日新聞に、「未来を作る人が育つ私学の教育」という記事が掲載されていました。女子学院の風間晴子院長は、「今の子どもたちは、私たち大人が経験したことのない世界を生きる世代です。まさに『未来を創る』と言えるでしょう」としながらも、その子ども達に対する学校の教育理念は145年間変わっていないと言います。それは、「聖書に基づいて自分を律しなさい」です。それが、「知る力と見抜く力とを身に着けて…愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように」（フィリピ1:9～10）生きていくための土台になると考えてきたからです。何をもって自分を律していくのか…それこそが、その人の自立を支え、その人の生き方を整え、その人の未来を方向づけていくことになります。

本日の聖書箇所には、重い皮膚病を患い、社会から疎外されていた10人が、イエスに憐れみを乞い、癒されていく場面が記されています。そして、10人の内、1人だけが、神を賛美しながらイエスのもとに戻って来たようです。その様子を見たイエスは、「この外国人の他に、神を賛美するために戻って来た者はいないのか」（18節）と語りました。イエスは何も、「菓子折りの１つでも持って来るのが礼儀だろう」と恩着せがましく言っているのではありません。病が癒えたとしても、10人が再び復帰していく社会には、人間が作り出す経済格差、民族的対立、偏見や差別等が相も変わらず待ち受けています。また、再び重い皮膚病を患い、再び社会から疎外される時が来ないとも限りません。そんな、過酷な現実の中を進み行くにあたって、イエスはご自分のところへ「戻って来て欲しい」と強く願っておられるのです。

人は、思い通りに生きることが、即ち、自分にとって必要なこと、幸せなことであるとは限りません。というより、人生は自ずと思い通りにいかないものです。だからこそ、私たちには、現実を見据えたり、判断したりするための土台、自分自身を律する「何か」が必要です。それがあって初めて、思い切って立ち上がり、未来に向かって一歩前に踏み出すことができるのだと思います。

イエスのもとに戻った1人と他の９人との決定的な違いは、「立ち上がって、行きなさい」（19節）という主イエスの言葉を背後に聞きながら、社会へと再び歩み出していけたかどうかにあります。主イエスにおいて自分を律する時、私たちは、自分のことや今のこの現実を勝手に判断し、諦めることは許されていません。この世を歩み「行く」ために、聖書の言葉に「戻り」ましょう。

（文責：望月達朗牧師）